《書評》横山真一『自由民権の家族史 新潟 山添武治家の近現代』（日本経済評論社）

小林 朗

本書は、新潟の青年民権家、山添武治と家族の歴史をテーマにして書かれた。

山添の出身は蒲原郡金巻村（新潟市西区大野町）。代々、酒屋を営んでいた家の長男として生まれた。20歳のとき、自由民権運動に参加し、政治活動を熱心に行う。自由民権運動は、近代日本最初の民主主義運動で、自由とそれに基づく諸権利の獲得を目指した政治活動であった。隣村の木場村には新潟自由民権運動の指導者であった山際七司がおり、山添は山際から大きな影響を受ける。新潟も全国でも、1881（明治14）年前後、民権運動に多くの青年が参加する。結社を結成し、新聞に投稿し、演説を行った。山添と青年民権家は主体的に新しい国づくりの機会を与えられたのである。国会開設、憲法制定はまだされていなかった。民権運動が盛り上がる。山添も躍動していくのである。

また、山添は、1910（明治43）年創刊の『新潟毎日新聞』の創業者でもあった。

本書では、山添武治の人生を著者は読者に明らかにしている。「第一部 山添武治の近代」の中で「序章 青年民権家から新聞創業者へ」「第一章 近世後期の西蒲原郡と山添家」「第二章 青年民権運動の胎動」「第三章 青年民権運動の高揚」「第四章 山際七司の選挙・国権論」「第五章 国家と人材育成」「第六章 庄内に学ぶ」「第七章 政党政治と新聞」「第八章『新潟毎日新

聞』の創刊」「第九章 山添武治の最後」の構成になっている。

しかし、著者は新潟県内の明治政治史やジャーナリズム研究から避けて通ることができない人物の一人とわかる山添武治の伝記ないし人物論だけを書くことに終始しなかった。民権家個人や自由民権運動全体を明らかにする著作は多くあったが、著者は民権家の家族の歴史に光を当てることに意欲的に行った。

その理由として、著者は3点の理由を「はじめに」書いている。第一に、「人間は他者との繋がりなしに存在できない生物でだからである。人が他者と最初に結ぶ関係が家族関係だとすれば、家族の存在を抜きに個人を語ることができない」「家族ないし家族史の解明は、大げさに言えば人類永遠のテーマといってよいであろう」と述べている。第二に、「家族を取り上げることで、民権家ゆかりの人びとの軌跡をたどることができる」としている。第三として、「家族は市井の人びとであり、家族を分析することは、自由民権運動の周囲にいた無名の人びとの足跡や考えを明らかにすることである」と表明している。

山添武治の家族は、妻・長男武・長女孝・二男・三男三郎・二女の7人家族であった。著者は第二部で家族の歴史を一人ひとり明らかにした。それは対象時間を昭和前期まで広げていくことになる。「第二部 山添武治家の近現代」は、「第一章 妻柱 キリスト教受洗」「第二章 長男武 貧困と民主主義」「第三章 長女孝 乗鞍の生活と主婦」「第四章 二男直 共産主義と社会変革」「第五章 三男三郎 科学的合理精神と社会への眼差し」「第六章 二女正 自立への道」で構成されている。

著者の、山添家の歴史を通して、近現代史を通観し未来を展望したい意欲がわかる。

著者は、２０２１年10月25日、…65歳で死去された。本書は著者の最後の著作になる。著者は読者に問う本になる。著者の投げたボールを私たちはどのように受け止めてゆくべきだろうか。

著者と奥様は私の大学の先輩である。歴史学科で、自主ゼミであった近代史研究会でご一緒だった。この時代は、歴史学研究は民衆史が主流となっていた。この研究会にも大きな影響をあたえていた。毎年、夏休

みになるとフィールドワークをともなって、その年のテーマにそった夏期合宿が実施されていた。4年生が卒業論文と就職活動があるので、3年生が中心になって合宿を運営していた。

1年のとき、研究会は自由民権運動がテーマになっていた。合宿は秩父事件を調べるために、秩父で行った。この合宿前に、3年生の著者が1年生を誘って、秩父へ日帰りで行くことになった。私は歴史は英雄、偉人が動かしていると思っていたので、行き帰りの著者の話、色川大吉の『新編　明治精神史』（中央公論社　1973年）の内容は新鮮であった。秩父では、「天朝さまに敵対すぞ味方しろ」と言った大野苗吉の村（秩父では耕地と呼ぶ）、まで行ったことを覚えている。秩父の桑畑の風景が脳裏に焼きついていた。秩父では民衆に関する碑がなかったが、警察、軍といった取り締まる人々が殉職した碑が多くあったことも覚えている。フィールドワークの重要性を知ったのである。

私自身、著者によって歴史学の洗礼を受けたのである。自由民権運動に参加した民衆とそれ以外の民衆について、どうみていくのか、その年は討論していた。

この最初の経験が生きて、私が3年生になったとき、足尾銅山鉱毒事件を調べるために、佐野、谷中村、足尾へ合宿をした。まさに秩父での合宿が原点になっていた。

その後、著者は結婚を機に、新潟へ来られて高校教師になられた。最初の赴任校が黒埼高校であった。自由民権の歴史研究を続けたいと考えていた著者が、『黒埼町史』編集に参加される。そこで、山際七司文書に出会う。その中で、山添武治の足跡を知ることになる。著者は奥様が「刊行に寄せて」で、「（著者が）あと五年あったら……、山際七司のことを書きたかったのでしょう」と書いている。きっと著者はやり残した山際七司を執筆できなくて、残念で仕方なかったと思う。あまりにも早い死といえる。

せっかく、新潟に来られた34年間、私は著者とじっくりと話をすることができなかった。歴教協サークルや集会などでお会いしていたが、挨拶を交わす程度だった。

著者が、退職されて新潟県立文書館に勤務されてから、同じ大学出身者の後輩が上杉謙信の講演を行ったときに、久しぶりに私はお会いした。しかし、これが最後になってしまった。家族のことや近況を話したこ

とを覚えている。

著者は、大学時代から生涯、自由民権運動研究を地道に40年以上もやってこられた。この継続性には頭がさがる思いである。

著者が亡くなったために、校訂は伊東祐之・高島千代が行っている。「校訂にあたって」では、著者が山添武治の二女正を執筆するタイトル、「自立と家父長制批判」とあったが、「家父長制批判」の内容がなかったので、「自立への道」としたと書いている。きっと、著者に時間が保障されていれば、「家父長制批判」を記述していたのだろう。惜しくて仕方がない。妻、柱・長女、孝・二女、正について、著者は「戦前または戦中に夫やまわりの男性からその労働を正当に評価されなかった。（中略）現在でも女性の諸権利確立はいまだ発展途上にある。一四〇年前に提起された自由民権の課題は、我々の目の前に横たわっている。やるべき仕事は数多く残されているといえよう」と「おわりに」の最後を締めくくっている。著者が自由民権と現代をしっかりとオーバーラップされている。

著者は過去と現在の連続性の指摘について、『カムイ伝』の言葉をひいている。「我々の祖先も、そして、現代の我々もそのまずしい社会にいきている。この物語の主人公…カムイ、正助、竜之介らも、結局、小さなことのために、大きなことをしてきえていったのである。しかし、人びとのあとには、人びとがつづき、そして、今、我々があるのである」と、著者の信条が出ている。ぜひとも本書を一読してもらいたい。

（こばやし　あきら・新潟市）